The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高齢者のソーシャルサポートの提供に対する評価の質的検討
Author(s)	豊島, 彩; 佐藤, 眞一
Citation	生老病死の行動科学. 2014, 17-18, p. 65-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/36359
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

原著論文

高齢者のソーシャルサポートの提供に対する評価の質的検討

Providing social support among older adults: A qualitative study

（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程）豊　島　　彩
（大阪大学大学院人間科学研究科）佐　藤　眞　一

Abstract

The aim of this study was to investigate older adults' perceptions about providing social support to one another. Twelve people aged 65 and over（4 male, 8 female; mean age = 78.0, SD = 4.9）participated in the study. They underwent semi-structured interviews regarding attitudes about providing social support in daily life. Content analysis revealed 6 categories from positive episodes and 5 categories from negative episodes, and indicated that to a certain extent, the act of providing support is important to older adults for developing close relationships with others. However, older adults face some difficulties despite their eagerness to help others, including limited resources for providing social support, a lack of opportunities to help others, and the reluctance to interfere in the lives of others.

Key word: social support, older adults, qualitative study, mental health

Ⅰ　背景

高齢期に人々は身体機能の低下や退職などのライフイベントによる社会的役割の喪失を経験するため、必然的に他者から援助を受ける機会が多くなることが予想される。高齢期の主観的well-being（モラール）に関わる社会的要因の一つとして、ソーシャルサポートの授受との関連について老年学の分野でも多くの研究がされてきた。ソーシャルサポートとは、対人関係の機能的側面を示し、具体的には家族や友人から援助を受けられるかを認知することとされる（岩佐, 2011）。一方、配偶者の有無や家族構成といった対人関係の構造的側面はソーシャルネットワークと呼ばれ（野口, 1990）、この 2 つの側面を合わせたソーシャルサポート・ネットワークが欠如した状態が社会的孤立とされる。社会的孤立とは、社会における人と人との結びつきや、その結びつきを通して得られる他者からの援助や有益な情報が得られないことを意味する。高齢化が進む我が国においては、高齢期の心身の健康をいかに維持するかという重大な課題に向けて、well-beingの維持、向上を見据えた実用的研究がなされ（Antonucci, 1985; 1990: 平野, 1998: 金・甲斐・久田, 2000: 野口, 1990）、高齢期においてソーシャルサポートを知覚していることが、自尊感情（ex, 福岡・橋本, 2000: 飯田, 2000: 三浦・上里, 2012）や生活満足度（ex, 金・杉澤・岡林・深谷・柴田, 1999; 林・岡田・白澤, 2008）を高めることが示されている。

以上に挙げた研究を含め、従来の研究ではサポートの受け手か与え手かの違いがあっても、ソーシャルサポートという一つの心理学的概念に包括し検討されてきた。しかし、高齢者がサポートを受けるだけではなく他者を援助していると認識すること（提供サポート）の重要性が見直され（柴田・長田・芳賀・古谷野, 1993）、提供サポートも主観的well-beingと関連があることが明らかにされた（Brown, Nesse, Vinokur, & Smith, 2003 : 金・李・久

田・甲斐, 1996: 豊島・佐藤, 2013a)。

Brown et al.（2003）の研究では、サポートの受容の効果を考慮しても、提供サポートが死亡率を予測することが報告され、健康面との関連が示唆された。また、心理面との関連についても、ソーシャルサポートの受容と提供の頻度が共に高い群は、生活満足度（金他. 1996; 増地・岸, 2001）や、主観的well-being （平野, 1998)、そして自尊感情（三浦・上里, 2006）が高いと報告されている。つまり、サポートの受容だけではなく、提供サポートを認識することでさらに心理的にポジティブな効果があると考えられる。

一方でサポートの行為やそれに対する認知的評価について、野口（1991）の研究では、例えば悩みごとの相談にのってもらったが、文句や小言を言われたり、他者の援助を余計なお世話と感じたりと、ソーシャルサポートには受け手側がネガティブな評価をする場合があることを指摘し、ネガティブサポートとして概念を区別した。中島（2000）は、高齢者が受容サポートをどう評価するかを検証するため、面接調査を行った結果、“人の迷惑になりたくない”“(やってもらうことは）あるけど、あんまりそうゆうのはうれしくない”（原文のまま引用）といった、受容サポートにネガティブな評価がされていることが分かった。主観的well-beingとの関連においても、受容サポートは抑うつ傾向との関連を報告する研究もあり（増地・岸, 2001)、受容サポートの研究では、ネガティブな側面も取り上げられてきた。一方、提供サポートに注目した研究は比較的少なく、ほとんどの研究がポジティブな側面しか捉えていない。

飯田（2000）は、受容サポートと提供サポートのバランスの取れた互恵的なサポート授受を行っているという評価が、主観的well-beingを高めるとする一方で、加齢とともに提供するサポート資源が限られるにつれ、高齢者は互恵性を保つことが困難となることを指摘した。また、サポートを提供するには、サポートを必要とする他者がいることが前提となり、高齢者自身が周囲にサポートを提供する必要がないとして、提供サポートに消極的である場合も考えられる。つまり、高齢者が提供サポートに対してポジティブな評価をすることもあれば、逆にネガティブな評価をすることも考えられる。

現在までの研究では、高齢期において提供サポートは主観的well-beingを高めると考えられているが、具体的な対策の提案へと繋げていくためには、高齢者が提供サポートに積極的になれるよう、提供サポートへの評価を検討し、ポジティブな評価とネガティブな評価について調査をする必要がある。しかし、日常場面において提供サポートに対して、高齢者がどのような評価をしているかの具体的な検討はなされていない。したがって、提供サポートに対する評価について、質的研究による知見の蓄積が必要である。

本研究では、日常場面における提供サポートに対する具体的評価について記述することを目的とした。そのため、個別にインタビュー調査を行い、提供サポートに対するポジティブな評価とネガティブな評価について、探索的に分析を行い、提供サポートについての新たな課題を検討する。

Ⅱ 方法

調査協力者と調査方法

大阪府A市の老人福祉センターの利用者12名（男性 4 名、女性 8 名、平均年齢78.0±4.9歳, range: 67 - 85）を対象に面接調査による半構造化インタビューおよび質問紙調査を行っ

た。老人福祉センターは高齢者の活発な社会的活動の場であり、利用者は家族以外にもソーシャルサポートの授受を行う対象を持つと考えられる。

調査は2012年11月５日－11月19日にかけて行われた。調査者は事前に老人福祉センターおよびA市に調査の依頼を行い、許可を得た上で調査を行った。調査を開始する２週間前に、老人福祉センター所属の各同好会の代表である利用者を集め、老人福祉センターにて調査の目的、方法を説明し、各同好会の会員や知人に通知を行うよう呼びかけを依頼した。調査期間中には、老人福祉センターに調査の案内を掲示し、調査協力者の募集を行った。そして、参加を希望した者、調査者および老人福祉センターの職員が参加の呼びかけを行い、参加の同意を得られた者を調査協力者とした。調査協力者の健康面への配慮として、調査は職員が施設で対応のできる状態で行い、調査協力者には体調や気分が悪くなった時などは随時調査の中止ができることを事前に説明した。また、本研究は調査協力者の家族関係や交友関係を詳しく尋ねるため、初対面の日にプライベートな内容を聞き出すのは難しいと判断し、面接を２回に分け行った。初回の面接時ではより多くの場面での出来事について尋ね、表面的な部分を中心に聞き出し、２回目の面接では特定の場面での出来事に限定して詳細に尋ねることとした。面接場所は、老人福祉センター内の相談室において、個別面接方式で行った。なお、本調査は大阪大学大学院人間科学研究科行動学系研究倫理委員会の承認を得たうえで実施した。

面接内容

初回インタビュー内容　初回のインタビューでの質問内容を表１に示した。

表1. 初回インタビューの質問内容

1	ご家族でも友人でも構わないのですが、誰か人に助けられたりお世話になることはありますか？
2	お話できる範囲で構わないのですが、それはどのような状況ですか？
	(回答が得られない場合)普段、まわりの人の心配事や愚痴を聞いてもらうことはありますか？
	それはどのような状況ですか？
	(回答が得られない場合)病気で数日寝込んだ時、看病や世話をしてもらうことはありますか？
	それはどのような状況ですか？
3	今度は自分がまわりの人を助けたりお世話をすることはありますか？どのような状況ですか？
4	お話できる範囲で構わないのですが、それはどのような状況ですか？
	(回答が得られない場合)普段、まわりの人の心配事や愚痴を聞くはありますか？
	それはどのような状況ですか？
	(回答が得られない場合)誰かが病気で数日寝込んだ時、看病や世話をすることはありますか？
	それはどのような状況ですか？
5	周りの人を助けたときどのような気持ちを感じますか？
6	周りの人を助けることで良いと感じることはなんですか？
7	逆に、困るなと感じることや、気になることはありますか？それはどのようなことですか？

１）ソーシャルサポートの授受について（表１. 質問1-4）

提供サポートについて具体的なイメージをさせるために、普段生活している中で、他者か

らサポートを受けること、他者にサポートを提供することの日常場面について、その状況、サポートの対象との関係、高齢期になってからの変化があったかを、あらかじめ定めたガイドラインに沿って尋ねた。しかし、話の流れや調査協力者との雰囲気を第一に優先し、面接開始時の導入質問以外は適宜順番を変更した。

２）提供サポートに対する認識（表１. 質問5-7）

日常場面でのサポートを提供することに対して、サポートへのポジティブな評価として、サポートを提供することで良かったと感じること、ネガティブな評価として、サポートを提供するのに困ると感じることについて半構造的に尋ねた。

質問紙項目　主観的well-beingの指標として、本研究では世界保健機関が開発した精神的健康の指標であるWHO-5 （Awata, Bech, Koizumi, Seki, Kuriyama, Hozawa, Ohmori, Nakaya, Matuoka, & Tsuji, 2007）と、孤独感を測定するUCLA孤独感尺度短縮版（豊島・佐藤, 2013b）を使用した。WHO-5は合計５項目からなり、最近２週間の精神的健康について「１.いつも」「２.ほとんどいつも」「３.半分以上の期間を」「４.半分以下の期間を」「５.ほんのたまに」「６.まったくない」の６件法で回答された。UCLA孤独感尺度短縮版は６項目から構成され、各項目の事柄を日頃どのくらい感じているかについて「１.いつも」「２.ときどき」「３.たまに」「４.該当しない」の４件法で尋ねた。本研究では、分析の際に逆転項目の得点の置換を行い、得点が高い程、孤独感が高くなるよう得点を変換した。その他、個人的属性として年齢、性別、現在の居住形態、現在の居住形態になってからの年数について尋ねた。

第2回インタビュー内容　２回目のインタビューでの質問内容を表２に示した。

表2. 第2回の質問内容

1-1 普段、まわりの人の心配事や愚痴を聞くことはありますか？
1-2 そのときどのような気持ちを感じますか？
1-3 そのことで良いと感じることはなんですか？
1-4 逆に、困るなと感じることや、気になることはありますか？
2-1 誰かが病気で数日寝込んだ時、看病や世話をすることはありますか？
2-2 そのときどのような気持ちを感じますか？
2-3 そのことで良いと感じることはなんですか？
2-4 逆に、困るなと感じることや、気になることはありますか？
3-1 前回も同じような質問をしましたが、何か考え直したことや思い出したことはありますか？
3-2 それはどのようなことですか？

２回目のインタビュー調査では、提供サポートに対する評価について詳細に尋ねるため、具体的場面として斎藤・近藤・吉井・平井・末盛・村田（2005）の項目内容（「だれかの心配事や愚痴を聞くこと」、「知人が病気で数日間寝込んだとき、看病や世話をすること」）について、日常でその様な場面があるかを尋ねた。そして、初回と同様に提供サポートに対してポジティブな評価とネガティブな評価について半構造的に尋ねた。質問項目のサポート内容以外にも、調査協力者が初回の面接時などで挙げたソーシャルサポートがあれば、それに

対する評価も尋ねた。最後に前回のインタビューを受けて、考え直したことや思い出したことがないかを尋ねて、インタビューを終了とした。

手続き

初回の面接では、はじめに、研究の主旨、インタビュー内容、面接を2回に分けて行うこと、プライバシーの保護について、調査は任意であり強制ではないこと、会話内容を録音すること、録音内容は分析終了後に消去することについて文書および口頭で説明を行い、同意書への署名を得たうえでインタビューを行った。インタビューの会話内容はICレコーダーを使用し、音声データとして録音した。インタビュー時間は約20分とし、インタビュー終了後、個人的属性、および孤独感と主観的well-beingを測定するため、5分程度質問紙への回答を求めた。質問紙の回答が終了した後、調査協力者には対価としての謝礼を渡し、2回目の面接の協力することについて改めて確認を行い初回の面接を終了した。2回目の面接では、初回と同様に、調査内容を確認してからインタビューを行った。インタビュー時間は約20分とし、インタビュー終了後、調査を終了とした。

Ⅲ　結果

調査協力者の属性および特徴

本研究の調査協力者の属性を表3に示した。12名のうち独居の者は3名、夫婦のみの世帯の者が5名、二世帯または三世帯の者が4名であった。UCLA孤独感尺度短縮版の平均得点は9.25（SD = 2.96, range: 6-15）であり、WHO-5の平均得点は23.08（SD = 4.85, range: 15-29）であった。この結果は、一般の高齢者を対象とした豊島・佐藤（2013b）の結果と比較すると本研究の調査協力者の得点はほぼ同じである。よって、本研究はこれを支持する結果であり、調査協力者はある程度主観的well-beingが維持されている集団であると考えられる。

表3. 研究協力者の属性

ID	性別	年齢	同居家族	現在の居住形態になってからの年数	WHO-5	孤独感
A	男性	67	配偶者	3年	26	6
B	女性	74	独居	7年	29	7
C	女性	74	配偶者	22年	26	11
D	女性	75	配偶者	30年	15	11
E	女性	76	息子・嫁・孫	23年	29	6
F	女性	78	独居	15年	27	7
G	男性	78	配偶者・娘	50年	26	13
H	女性	81	息子・嫁・孫	23年	20	8
I	女性	82	独居	25年	20	13
J	女性	83	息子・嫁・孫・ひ孫	20年	17	14
K	男性	83	配偶者	42年	18	7
L	男性	85	配偶者	20年	24	8

注）WHO-5は項目の合計得点、孤独感はUCLA孤独感尺度の合計得点

表4. ポジティブな評価のカテゴリー

カテゴリー名	カテゴリーの定義　◆具体的発言例　(発言者)	人数	発話数
社会的規範意識	他者を援助するのは当然であるという道徳観や自分が援助をしなくてはならないという義務感 ◆(人の面倒をみるのは)自然のことだと思う。みない方がおかしいんじゃないですか。(I) ◆自分がやらなきゃならないという(気持ちが強い)。(A)	12	36
対象の肯定的な反応への期待	サポートした対象者から感謝されたり、対象者に喜んでもらえたりすることへの期待や評価 ◆言ってあげれば、ありがとうね助かったわ、って(相手が)言ってくれたらな、よかったなって(B) ◆相手が喜んでくれて、それで納得してくれて、それなら友達がけんかせんでええし(B)	7	20
サポートを提供する達成感	提供をすること自体に対して達成感や満足感を感じること ◆人の世話する、・・・そうゆうことができるっていうのは逆で、幸せなんだなって思う。(A) ◆すこしでも(サポートが)出来る様に最近ちょっとなったなぁと、やりがいが、いいなぁと思っているんですよ(L)	7	14
援助対象とのサポート交換	特定の対象に対してサポートを交換しているという評価 ◆私も迷惑かけてることあるし、て(相手が)言うから。・・・お互いやなって言ってます。(I) ◆自分も助けるし、相手も助けてくれるし、だから近所に友達を作っておくっていう、(B)	7	14
社会からのサポートの期待	誰かを助けることで社会からサポートを受けたいという期待 ◆私あんたにしてあげたらな、また回り回ってだれかが私にしてくれる様になるから、・・・って(助けてあげた人に)言った。(D)	3	10
個人の特性	個人の特性としてサポートの提供に積極的であるとする評価 ◆親分肌みたいなね。・・・そうゆうところがあったのかなって思うことがある。(A) ◆世話好きやな、って。もって生まれた性分かな、って。(B)	3	10

カテゴリー分類について

初回調査での提供サポートに対する認識（表１. 質問5-7）と、第２回調査の質問で得られたデータを対象に内容分析を行った。手順として、まず音声データをテキストデータへと変換した。次に文字化した対象の回答を精読し、その意味や内容を損なうことのない範囲で意味のない接続語など不要な語句の削除を行い逐語録の整理を行った。次に、逐語録から提供サポートの評価に関するエピソードを調査者と心理学を専攻する大学院生１名により抽出した。次に、調査者と先の１名で提供サポートに対して積極的な内容と消極的な内容を含む回答を分類し、２つに分類した回答について小カテゴリーを作成した。そして、協議しなが

ら、生成したカテゴリーの追加・削除・統合を繰り返し、最終的に合計194の発話が得られ11のカテゴリーに分類された。最後に集計を行った後、心理学を専攻する別の大学院生２名で独立的に評定を行った。その結果、判定の一致率は90.7%であった。評定が不一致であった回答については、調査者と評定を行った２名とで協議を行い決定した。

提供サポートへのポジティブな評価について

分析の結果、提供サポートにポジティブな評価は「社会的規範意識」「対象の肯定的な反応への期待」「サポートを提供する達成感」「援助対象とのサポート交換」「社会からのサポートの期待」「個人の特性」の６個のカテゴリー（表４）に分類された。

「社会的規範意識」は、他者から援助を求められたら助けるのは当たり前とする発言を分類し、「他者を援助するのは当然であるという道徳観や自分が援助をしなくてはならないという義務感」と定義した。具体的な発言として「*（人の面倒をみるのは）自然のことだと思う。みない方がおかしいんじゃないですか。*（調査協力者I）」といった、他者を援助することは当然のこととするものや「*自分がやらなきゃならないという（気持ちが強い）*（調査協力者A）」といった、提供サポートを自分の義務として捉えるものがあった。このカテゴリーは12名（発話数36）の発話が分類された。

「対象の肯定的な反応への期待」について、「*言ってあげれば、ありがとうね助かったわ、って（相手が）言ってくれたらな、よかったなって*（調査協力者B）」といった発言が分類され、７名（発話数20）の発話が分類された。これらの発言はサポート対象からの感謝の言葉や喜ぶ様子といった反応に対して、喜びや達成感を感じるという評価であった。よって、「サポートした対象者から感謝されたり、対象者に喜んでもらえたりすることへの期待や評価」と定義した。

「サポートを提供する達成感」については、他者にサポートを提供する行為自体に達成感ややりがいを感じている発言を分類した。よって、「提供をすること自体に対して達成感や満足感を感じること」と定義した。具体的内容として「*人の世話する、するっていう感覚は当時はなかったけど、今だからそうゆうことができるっていうのは逆で、幸せなんだなって思う。*（調査協力者A）」といった発言に代表されるように、高齢期になってからも他者を援助することへの満足感が挙げられた。このカテゴリーには７名（発話数14）の発話が分類された。

「援助対象とのサポート交換」は、日頃から家族や友人といった特定の対象とサポートの授受を行っており、互いにサポートをしているとする発言を分類した。よって、「特定の対象に対してサポートを交換しているという評価」と定義した。具体的発言としては「*私も迷惑かけていることあるし、て（相手が）言うから。・・・お互いやなって言ってます。*（調査協力者I）」、「*自分も助けるし、相手も助けてくれるし、だから近所に友達を作っておくっていう*（調査協力者B）」といった普段から他者と互いにサポートの授受を行っているという発言が得られ、７名（発話数14）の発話が分類された。

「社会からのサポートの期待」については、「*私あんたにしてあげたらな、また回り回ってだれかが私にしてくれる様になるから、・・・って（助けてあげた人に）言った。*（調査協力者D）」といった発言に代表されるように、サポートをした対象からではなく社会から返報を受けることができるといった発言を分類した。よって、「誰かを助けることで社会か

らサポートを受けたいという期待」と定義した。このカテゴリーには３名（発話数10）の発話が分類された。

「個人の特性」は、自分はサポートを提供することが好きな性格であり、サポートを必要とする人がいたら積極的に援助をするという発言を分類した。よって「個人の特性として提供サポートに積極的であるとする評価」と定義をした。具体的な発言としては「*親分肌みたいなね。・・・そうゆうところがあったのかなって思うことがある。*（調査協力者A）」、「*世話好きやな、って。もって生まれた性分かな、って。*（調査協力者B）」といったものが分類され３名（発話数10）の発話が分類された。

提供サポートへのネガティブな評価について

提供サポートにネガティブな評価は、「対象への気遣い」「サポート資源の不足」「サポートを提供する機会の欠如」「他者に介入することへの抵抗感」「サポートをした後の不快感」の５個のカデゴリー（表５）に分類された。

表5. ネガティブな評価のカテゴリー

カテゴリー名	カテゴリーの定義　◆具体的発言例　(発言者)	人数	発話数
対象への気遣い	サポートした相手に対する気遣い・自分に対する否定的評価に対する懸念 ◆相手がそう言ったら怒るから、あんまりでしょ。本当のこと言ったら相手は怒るかもしれない(L) ◆(相談にのったとき)羨ましいわって言われるから、あんまり言ってもいけないかなと思うことあります。(C)	8	26
サポート資源の不足	自分が提供できるサポート資源を持たないという評価 ◆我々に尋ねるよりかはやっぱり、･･･聞かれても具体的にこちらは何も答えられないからね(J) ◆それが、お世話ができないんです、この年で。(I)	8	15
サポートを提供する機会の欠如	現在の環境にサポートを提供する必要や機会がないという評価 ◆相談ごとなんかない。ないもんね、うちなんかみんな幸せですよ。割に環境はいいですね。(I) ◆(相談に)きたら私もっとしてあげるのになあ、とか思うけどないんですよね (C)	7	32
他者に介入することの抵抗感	家庭や個人のプライベートに踏み込むことに抵抗を感じること ◆ご家族がみんないらっしゃるから、あまり、他人の家にこうね･･･(H) ◆他人さん友達とかだったら、やっぱりちょっと距離をおきますでしょ。(I)	7	13
サポートをした後の不快感	サポートをすることで自分が嫌な思いをするのではないかという懸念 ◆後でいったらどうのこうのって言われたらうるさいんで、またね。(J) ◆話の結果、気分が良くないなというかありますね。(L)	2	4

「対象への気遣い」については、サポートを提供する際、「*相手がそう言ったら怒るから、あんまりでしょ。本当のこと言ったら相手は怒るかもしれない*（調査協力者L）」といった、自分のサポートで相手に嫌な思いをさせてしまうかもしれないと懸念し、相手を気遣う発言を分類した。よって、「サポートした相手に対する気遣い・自分に対する否定的評価に対する懸念」と定義した。このカテゴリーには8名（発話数26）の発話が分類された。

「サポート資源の不足」については、サポートを提供したくても自分にはそれだけの知識や体力といった資源がないという発言を分類し、「自分が提供できるサポート資源を持たないという評価」と定義した。具体的発言として、「*我々に尋ねるよりかはやっぱり、・・・聞かれても具体的にこちらは何も答えられないからね*（調査協力者J）」といった、相談にのられても提供できる知識がないという発言や、「*それが、お世話ができないんです、この年で*（調査協力者I）」といった、高齢のために他者を援助することができないという発言が得られ、8名（発話数15）の発話が分類された。

「サポートを提供する機会の欠如」については、現在の環境では自分がサポートを提供する必要性がないことや、したくてもその機会がないと捉えている発言を分類し、「現在の環境にサポートを提供する必要や機会がないという評価」と定義した。具体的には「*相談ごとなんかない。ないもんね、うちなんかみんな幸せですよ。割に環境はいいですね*（調査協力者I）」といった、周囲の環境には援助が必要な問題がないとするものや、「*（相談に）きたら私もっとしてあげるのになあ、とか思うけどないんですよね*（調査協力者C）」といったサポートをする意欲はあるがその機会がないというものが分類された。このカテゴリーには7名（発話数13）の発話が分類された。

「他者に介入することへの抵抗感」について、「*ご家族がみんないらっしゃるから、あまり、他人の家にこうね・・・*（調査協力者H）」といった、他者の家庭に介入することに抵抗感を示す発言を分類した。また、「*他人さん友達とかだったら、やっぱりちょっと距離をおきますでしょ*（調査協力者I）」といった、他人とはある程度の距離をおくといった発言が得られ、「家庭や個人のプライベートに踏み込むことに抵抗を感じること」と定義した。このカテゴリーには7名（発話数13）の発話が分類された。

「サポートをした後の不快感」について、「対象への気遣い」で分類したサポート対象が否定的な評価をするのではなく、「*後でどうのこうのって言われたらうるさいんで、またね*（調査協力者J）」といった、サポートを提供することで自身が嫌な思いをするといった発言を分類した。よって、「サポートをすることで自分が嫌な思いをするのではないかという懸念」と定義した。このカテゴリーは2名（発話数4）の発話が分類された。

Ⅳ　考察

本研究では、日常場面における提供サポートに対する具体的評価を記述することを目的として質的検討を行った。その結果、提供サポートに対するポジティブな評価として、「社会的規範意識」「対象の肯定的な反応への期待」「サポートを提供する達成感」「援助対象とのサポート交換」「社会からのサポートの期待「個人の特性」の6個のカテゴリーが得られた。ネガティブな評価としては、「対象への気遣い」「サポート資源の不足」「サポートを提供する機会の欠如」「他者に介入することへの抵抗感」「サポートをした後の不快感」の5個のカデゴリーが得られた。

調査協力者の属性および特徴

WHO-5やUSLA孤独感尺度の得点から、本研究での調査協力者は、高齢期になっても、孤独に陥らず主観的well-beingを維持していると考えられ、加齢によるライフスタイルや役割の変化に適応していると言える。また、本研究では老人福祉センターの利用者を対象としており、独居や夫婦のみの世帯でも積極的に社会活動に参加している集団であったことが確認された。したがって、本研究では孤独感が低く、社会活動にも参加し独居や夫婦のみの世帯であってもソーシャルサポートの授受を行うことが可能な環境にいる集団から得られた結果として考察する。

提供サポートへのポジティブな評価について

提供サポートに対するポジティブな評価として、調査協力者全員の発言が「社会的規範意識」のカテゴリーに分類され、提供サポートを“自然のこと”“自分がやらないといけない”とする発言が得られた。つまり、提供サポートには個人の対人関係の主観的評価以外に、規範意識として認識されていることが示唆される。そして、調査協力者全員から発言が得られたことから、今回の調査協力者全員が他者を援助することは当然であると認識していた。

次に「対象の肯定的な反応への期待」「サポートを提供する達成感」といったカテゴリーが得られたことについて、これらのカテゴリーは、どちらも他者を援助することで他者からの肯定的評価や満足感が得られるとする。この結果は中島（2000）が行った質的研究でも同様の結果が得られており、高齢期になっても他者へサポートを提供することが好ましいものであると考えられる。前者は対象からのポジティブなフィードバックによるものであり、後者はサポートを提供する行為自体に対する評価であると考えられる。本研究の結果は、主観的well-beingを維持し加齢によるライフスタイルや役割の変化に適応していると考えられる集団から得られた結果である。そのため、サポートを提供により、他者から感謝されることで親密な関係を築き、自分自身も満足感を感じることが、主観的well-beingの維持と関連することが示唆される。

次に「援助対象とのサポート交換」のカテゴリーでは、サポート対象とは日頃から互いにサポートの授受を行っているとする発言が得られた。つまり、提供サポートは他者を援助しているかだけでなく、周囲と互恵的な関係を築いているということを表すことが考えられ、互いに援助をしているという関係性を認識することが重要であると考えられる。

次に「社会からのサポートの期待」のカテゴリーでは、自分が提供したサポートが回り回って自分に返ってくるという発言が得られた。この発言はNowak & Sigmund（1998a,b）が提唱した間接互恵性に関連すると考えられる。間接互恵性は他者への利他行動は直接相手からの返報が期待できなくても、回り回って別の他者から返報を受けるという仕組みを指す（真島・高橋, 2005a）。すなわち、“繰り返しのつきあいのある二者間においては自分が利他的に振舞うことによって相手から返報を引き出すことができるとする”（真島・高橋, 2005b）「互恵的利他主義」（Trivers, 1971）とは異なり、特定の対象間で互恵性が成立していなくても、その周囲の環境から返報を得ることで他者への援助行動が成立すると考える。本研究の結果から、日常場面のソーシャルサポートについても自分がしたサポートはその対象からでなく、回り回って返ってくるといった間接互恵的な評価がなされているこ

とが分かった。

最後に「個人の特性」について、いわゆる自分は“親分肌”“世話好き”であるといった表現に見られるように、もともと他者を援助することに積極的であるという発言が得られた。援助行動と関連するとされる個人の性格特性に共感性の高さが考えられる（Coke, Baston, & McDavis,1978）。共感性とは“他者の感情体験に対する感情的反応性”とされ（Davis, 1983）、本研究の結果で得られた発言では、他者の感情を察し苦痛を軽減したいという情動を持ちやすいと自覚していると考えられる。

提供サポートへのネガティブな評価について

まず、「サポートを提供する機会の欠如」について、サポートを提供するにはサポートを必要とする他者がいることが前提となり、現在の環境にはサポートを提供する必要がないと認識されていることが分かった。また、「*（相談に）きたら私もっとしてあげるのになあ、とか思うけどないんですよね*（調査協力者C）」といったような、他者を援助したいと思っているのにその機会がないとする発言が得られ、提供できるサポート資源を持ち、他者を援助することに意欲的な高齢者が十分にその資源を活用できないと感じていることが分かった。よって、提供サポートの問題点として、提供する場が不足しているということが挙げられる。

「対象への気遣い」「サポートをした後のネガティブな影響」について、自分がサポートをしたことで相手に不快な思いをさせてしまったり、自分が嫌な思いをしたりと、サポートがネガティブな結果になることを高齢者が懸念することが示された。つまり、受容サポートの場合、受け手の評価によりネガティブなサポートであることが区別されるが（野口, 1991）、提供サポートは受け手の反応だけでなく、それを与え手がどう捉えるかといったことが重要となる。

次に、「他者に介入することの抵抗感」については、サポートを提供しようとしても、サポート対象が家庭を持っている場合、他者の家庭事情に踏み込むのは抵抗があることが分かった。よって、親しい友人といったある程度ソーシャルサポートの授受が可能な間柄であっても、他者とはある程度の距離を置きたいと評価されていることが言える。

また、「サポート資源の不足」についても、加齢によって自分には他者を援助するだけの資源を持たないとする発言が得られ、自身をサポート資源として見なしていないことが示された。このカテゴリーの発言から、高齢のため援助資源が限られることにより、高齢者にとってサポートを積極的に提供しようと意図することに困難を伴う場合があると考えられる。この結果は、加齢とともにサポート資源が限られるにつれ、高齢者は互恵性を保つことが困難となるとした飯田（2000）の指摘を支持する結果であり、提供サポートへのポジティブな評価にも挙げられた「援助対象のサポート交換」による互恵的な社会関係の維持が困難となってくるためと考えられる。

まとめ

本研究の結果から、提供サポートへのポジティブな評価として、サポートを提供することで他者からの感謝や達成感を感じるだけでなく、周囲との互恵的関係の維持や、間接互恵性に関連することが考えられる。よって、サポートを提供することは他者や周囲との親密な関

係性を築くという点で重要であることが示唆された。これは、提供サポートに対する評価についても、背景に社会関係の親密さといった主観的評価が関連していることが考えられる。本研究の調査協力者が、主観的well-beingが比較的維持されている集団であり、共通の認識として提供サポートを社会的規範として捉えていた。よって、他者を援助することの意識が相互に共有されることで、よりソーシャルサポートの交換がされやすい環境となり、主観的well-beingの維持に関連することが示唆される。

一方で、ネガティブな評価から提供サポートに対する課題点として、高齢者が援助することに意欲的であっても、提供する場がないということや、高齢者が提供したサポートがネガティブな結果になることを懸念することが示された。また、他者の家庭事情に踏み込むのには抵抗感を伴うことがあり、提供サポートを阻害していることが示唆される。さらに、高齢のため、提供できる資源が限られ、高齢者が自身をサポート資源として見なしていないことが考えられる。今後提供サポートの促進を目的とした具体的対策を考える際、以上に挙げたような高齢者自身の持つネガティブな評価にどう対応していくかが重要であると言えるであろう。

以上のことから、提供サポートは心理・社会的にポジティブな効果が見込まれるものの、一概に提供サポートを促すのではなく、高齢者自身が持つ提供することに対する抵抗感や、資源の減少に伴う提供する意欲の低下に対処する必要性がある。

謝辞

研究実施にご協力いただいた、老人福祉センターの職員のみなさま、調査にご協力いただきました利用者のみなさま、および研究にご協力頂いた大阪大学大学院人間科学研究科の辻本耐様、石井あゆ美様に深く感謝申し上げます。

本研究は、平成23～25年度科学研究費（基盤研究（B）課題番号23330211研究代表者：佐藤眞一）の助成により実施した。

引用文献

Antonucci, T. C. (1985). Personal characteristics, social support, and social behavior. In R. H. Binstock & E. Shanas (Eds.) *Handbook of aging and social sciences.* (2nd ed.) New York: Van Nostrand-Reinhold. pp. 94-128.

Antonucci, T. C. (1990). Social supports and social relationships. In R. H. Binstock & L. K. Gerge (Eds.) *Handbook of aging and the social sciences.* (3rd ed.) San Diego: Academic Press. pp 205-226.

Awata, S., Bech, P., Koizumi, Y., Seki, T., Kuriyama, S., Hozawa, A., & Tsuji, I. (2007). Validity and utility of the Japanese version of the WHO-five well-being index in the context of detecting suicidal ideation in elderly community residents. *International Psychogeriatrics*, **19**, 77-88.

Brown, S. L., Nesse, R. M., Vinokur, A. D., & Smith, D. M. (2003). Providing social support may be more beneficial than receiving it: results from a prospective study of mortality. *Psychological Science*, **14**, 320-327.

Coke, J. S., Baston, C., & McDavis, D. K. (1978). Empathic mediation of helping: a two-

stage model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 752-766.
Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
福岡欣治・橋本 宰. (2004). 高齢者の過去および現在のソーシャル・サポートと主観的幸福感の関係. 静岡文化芸術大学研究紀要, **5**, 55-60.
平野順子. (1998). 都市居住高齢者のソーシャルサポート授受. 家族社会学研究, **10**, 95-110.
林 暁淵・岡田進一・白澤政和. (2008). 大都市独居高齢者の子どもとのサポート授受パターンと生活満足度. 社会福祉学, **48**, 82-91.
飯田亜紀, (2000). 高齢者の心理的適応を支えるソーシャル・サポートの質―サポーターの種類とサポートの交換の主観的互恵性―. 健康心理学研究, **13**, 29-40.
岩佐　一. (2011). 高齢者のソーシャルサポート・ネットワーク評価尺度. 老年精神医学雑誌, **22**, 660-671.
金　恵京・甲斐一郎・久田 満・李 誠國, (2000). 農村在宅高齢者におけるソーシャルサポート授受と主観的幸福感, 老年社会科学, **22**, 395-404.
金 恵京・杉澤秀博・岡林秀樹・深谷太郎・柴田 博. (1999). 高齢者のソーシャル・サポートと生活満足度に関する縦断研究. 日本公衆衛生雑誌, **46**, 532-541.
金 恵京・李 誠國・久田 満・甲斐一郎. (1996). 韓国農村地域の在宅高齢者におけるソーシャル・サポートの授受と QOL. 日本公衆衛生雑誌, **43**, 37-49.
真島理恵・高橋伸幸. (2005a). 間接互恵性の成立―非寛容な選別主義に基づく利他行動の適応的基盤. 心理学研究, **76**, 436-444.
真島理恵・高橋伸幸. (2005b). 敵の味方は敵? 間接互恵性における二次情報の効果に対する理論的・実証的検討. 理論と方法, **20**, 177-195.
増地あゆみ・岸 玲子. (2001). 高齢者の抑うつとその関連要因についての文献的考察―ソーシャルサポート・ネットワークとの関連を中心に―. 日本公衆衛生雑誌, **48**, 435-448.
三浦正江・上里一郎, (2006). 高齢者におけるソーシャルサポート授受と自尊感情,生活充実感の関連. カウンセリング研究, **39**, 40-48.
三浦正江・上里一郎, (2012). 高齢者におけるソーシャルサポートの受領および提供とメンタルヘルスの関連―性別による違いに着目して―. 東京家政大学研究紀要人文社会科学, **52**, 41-46.
中島千織 (2000). 高齢者のソーシャル・サポートに関する探索的研究―個別面接データから― 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, **47**, 167-172.
野口祐二 (1991). 高齢者のソーシャルサポート：その概念と測定, 社会老年学, **34**, 39-48.
Nowak, M., & Sigmund, K. (1998a). The dynamics of indirect reciprocity. *Journal of Theoretical Biology*, **194**, 561-574.
Nowak, M., & Sigmund, K. (1998b). Evolution of indirect reciprocity by image scoring. *Nature*, **393**, 573-577.
斎藤嘉孝・近藤克則・吉井清子・平井　寛・末盛　慶・村田千代栄 (2005). 高齢者の健康とソーシャルサポート―受領サポートと提供サポート― 公衆衛生, **69**, 661-665.
柴田　博・長田久雄・芳賀　博・古谷野亘 (1993). 老年学入門 川島書店.

Trivers, R. (1971). The evolution of reciprocal altruism. *Quarterly Review of Biology*, **46**, 35-57.
豊島　彩・佐藤眞一（2013a）. 孤独感を媒介としたソーシャルサポートの授受と中高年者の精神的健康の関係―UCLA孤独感尺度第３版を用いて―. 老年社会科学, **35**, 29-38.
豊島　彩・佐藤眞一（2013b）. UCLA孤独感尺度第３版の短縮版の検討：大学生と中高年者における孤独感の関連の比較, 第24回日本発達心理学会大会論文集, pp425.